

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

家出森

小四・近藤 翼

「私、家出するから！」

八月の末のことだった。前田桃音は姉の前田音美と大ゲンカをしていた。ことの始まりは夕飯を誰が作るかという話だった。本来ならば音美が料理を作るはずだったが、音美がその仕事を桃音におしつけたのだ。まだ料理が全然できないというのに、おしつけられた桃音はイライラし、音美のお気に入りのゲーム機をこわしてしまったのだった。

「ええ。家出でもして頭を冷やしてきたら？」

桃音は音美にこれ以上言われたくなかったので、自分の部屋でさつさと荷づくりをして家を出ていった。

夜の街はみように静かで桃音はさみしくなり、帰ろうかとも思った。しかし、一度家を出ると帰りにくいものだ。桃音は仕方なくスリッケースをガラガラと音をたてて引いて歩いた。これからどこへ行こうか？ 桃音は考えた。いっそのこと静岡の祖母の家にも行ったほうがよいだろうか？

気づくと桃音は駅のところまで来ていた。ひとりで、しかも夜に駅に来るのは初めてだ。桃音はむねがドキドキしていた。人生初の家出だ。きんちようするし、なんだか少しワクワクもした。

「あの…」

桃音は駅のホームにいた駅員さんに話しかけた。

「ああ。君は家出っ子だね。それなら、あの黄色のドアの列車に乗るといいよ」

駅員さんはニコツと笑顔で言った。それから切っぶを桃音にわたした。

「えっ？ 切っぶのお金は払わなくていいんですか？」

桃音はわたされた切っぶを見て言った。切っぶは家の形をしていて、家の屋根の部分に、「家出っ子の黄色ドア列車」と書いてある。

「うん、大丈夫だよ。家出をしてきた子は無料なんだ」

桃音は駅員さんにお礼を言うと、窓わくやドアが黄色の見たこともないかわいらしい列車に乗った。

「家出森く、家出森く。お次は家出森にとまります」

（家出森？ そんな森あるの？）

桃音は少し不思議に思ったけれど、家出森でおりてみようと思った。

桃音はたった二両のレトロな雰囲気の列車の中を見回した。照明は桜の花の形で、車内をやさしい光で包みこんでいた。そして金色のつり革は、上品に美しく車内を彩っていた。その見たこともない列車にあるすべてのものに、桃音は目をかがやかせた。そして、窓の外を見て目が飛び出るほどおどろいた。目の前には、緑色の世界……。広大な森が広がっていたのだ。森はとても美しく、絵本にできそうな感じだった。

「すごい！」

桃音は、座席から身を乗りだして夢中になって見ていた。だから後ろに駅員さんがいることにまったく気づかなかった。駅員さんは、にっこり笑って桃音に言った。

「もしかしてあなたは以前、ここに来たことがありますか？」

桃音はちよつと考えて、駅員さんの言った意味が少し分かったよ

うな気がした。たしかにこの森はどこか見覚えがある。でも、はつきりとは思いつけない。

その時、列車のドアがタイミングよく開いた。駅員さんは、さあさあと目で合図を送った。桃音はうなずいて、列車をおりた。心地よい風がふいている。風にのって甘い、ほんのりとした香りがする。

「あっ！」

桃音は、やっと思い出した。桃音はここに音美と一緒に来たことがあったのだ。まだ、桃音が六才くらいの時だった。桃音と音美でけんかをして、ふたりとも家を追い出されたのだ。そして、列車に乗ってここに来た。きっと、そうだ。気づくと、桃音の足は甘い香りを追いかけていた。香りはどんどん強くなって、やがて香りのしているところについた。この香りの主は大きな木にさいた黄色の花だった。花びら一枚一枚がキラキラとかがやいていて、それはまるで金箔で作った花みたいだった。桃音は木によりかかって座った。そうすると、心の中のイライラやモヤモヤが不思議と消えていく。その時、

「桃音も来てたんだ」

後ろで声がした。音美だった。

「お姉ちゃん？」

桃音はびっくりした。まさか、音美も来ているとは思わなかったのだ。

「私も家出。桃音が家出したあと、お母さんとけんかしちゃった」

「なにそれ！」

ふたりは思わず笑ってしまった。

「ごめんね。私が悪かった」

音美が言うと、桃音は首をふって

「ううん。私もやりすぎた。ゲーム機こわしちゃってごめんね」
素直にあやまったら、なんだかとてもすっきりした。ふたりはし
ばふにねころんで、空を見上げた。夕日がまぶしい。

「ねえ、ふたりでここに来たの覚えてる？」

「うん」

桃音はうなずいた。音美はポケットから黄色の小さな花びらを出し
て言った。

「この花びらはね、前にここに来た時に持って帰ったんだけど、不
思議なことに全然かかってないんだよね」

「本当だ！　もしかして、私たち姉妹の愛のパワーじゃない？」

「だとしたら、これからも仲良くしないとね。この花がかれちゃう
もの」

ふたりはニコツと笑い合い、夕日に照らされた家出森に手をふつ
て歩きだした。
